夢のかけ橋
A bridge of dream

脚本家

市東（しとう） さやかさん

小さい頃から本を読むことが大好きでしたが、脚本家という職業があることは知りませんでした。大学を卒業した私は、目標としていた看護師となり病院に勤務していましたが、看護についての知識を深めたいと考え大学院へ進学。しかしその頃は新型コロナウイルスが流行しており、ステイホームを余儀なくされる生活に。そんな中、何気ない気持ちで見た宮藤官九郎（くどうかんくろう）さん脚本の一本の映画に衝撃を受け、現実を忘れて浸ることができました。それまで映画や演劇などに興味の無かった私ですが、良質なフィクションは人の心を癒す力を持っているという事実に気付き、好きなことにはのめり込み熱中してしまう性格から、自分でも脚本を書いてみたいと思うようになりました。当時はスクールに通う時間とお金が無かったため、独学で脚本を学び執筆。初めて応募した作品は一次審査で落選しましたが、その時大賞を受賞した生方美久（うぶかたみく）さんの前職が看護師と知り、負けず嫌いに火が着くことに。もう一度挑戦しようと決意し、昨年「ヤングシナリオ大賞」の大賞を受賞することができました。

現在は連続テレビドラマ「真夏のシンデレラ」の脚本を任されています。執筆は一人の仕事で、忙しく寝ることのできない日もあれば、原稿が進まずパソコンの前に座っているだけの日もあります。肉体的にはハードでも、ナース同士で協力して仕事に取り組むことができた看護師時代とは真逆の生活です。

看護師として看取りや緩和ケアを実践してきた経験を通して「人生はいつ終わるか分からないが、生き方は選べる」ということを学びました。今後は日常生活の愛おしさや小さな幸せを大切にできるような脚本を目指したいと考えています。鹿屋の皆さんにも、私の作品を見て感想をいただければうれしいですので、今後とも応援よろしくお願いします。

【右】「ヤングシナリオ大賞」受賞時。受賞作「瑠璃（るり）も玻璃（はり）も照らせば光る」は、ヤングケアラーを題材とした作品で、全国ネットで放送された。
【左】大学院では看護研究に取り組む。当時は、新型コロナの影響で医療現場は混沌としており、看護師を続けていけるか不安を抱えていた。

information

小学1年から高校３年まで串良町上小原に在住し、尚志館高校を卒業。現在は都内に住み、7月10日から始まったフジテレビ系列「真夏のシンデレラ」の脚本を執筆中。好きな看護師業務は今もアルバイトで続けている。